「総合的な学習の時間」の可能性と問題点

立教大学　奈須正裕

Ⅰ　総合的な学習でどんな子どもが育つのか？（別紙資料参照）

Ⅱ　総合的な学習をめぐるさまざまな言説から見えてくる問題点

1　隙間の時間？（教育課程上の位置づけ）

「領域」ではなく「時間」とはどういう意味？

実質的に第四領域とみなしてもよいのか？

教育課程編成上、どこに位置付くのか？

生活科との関係はどう考えればよいのか？

2　教科の補充・発展に用いてもいい？（この時間の性格・目標）

「自ら課題を見付け・・・」学習であれば内容は何でもよいのか？

教科でも「自ら課題を見付け・・・」を目指すのではないのか？

総則に示された２つのねらいはどう読めばよいのか？

※先行した教育課程審議会答申（平成１０年７月２９日）での記述：

①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

②情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付けること。

③問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育成すること。

④自己の生き方についての自覚を深めること。

※人間力戦略研究会報告（平成１５年４月１０日）より：

「豊かな社会参画の経験を通して自己の生き方を考え、しっかりとした将来展望をもって誠実に努力し続けられるよう、児童・生徒を育成することが重要である。」

3　活動・体験の時間？（内容編成の是非）

内容は「なんでもあり」なのか？

仮にそうだとしても「なんでも『あり』」と「「なんにも『なし』」は違うのではないか？

「内容」と「活動」が混乱していないか？

※教育課程審議会答申（平成１２年１２月４日）より：

「この時間の学習活動の展開に当たっては、学習指導要領に示された二つのねらい（中略）などを踏まえ、各学校において具体的な目標、内容を定めて指導を行うことが必要である。そして、その目標、内容に基づき、観点を定めて評価を行うことが必要である。（中略）「総合的な学習の時間」の評価については、この時間において行った「学習活動」を記述した上で、指導の目標や内容に基づいて定めた「観点」を記載し、それらの「観点」のうち、児童生徒の学習状況に顕著な事項がある場合などにその特徴を記載するなど、児童生徒にどのような力が身に付いたかを文章で記述する「評価」の欄を設けることが適当である。」

表　総合的な学習の時間の内容系列表（岡山県久世町立遷喬小学校）

	目　標	内　容	3・4年	5・6年
国際	自国の歴史や文化について理解と愛着をもち，異文化を理解・尊重し，国際社会の一員として共に生きる資質や能力を育てる。	ア　日本の歴史や文化などについて理解するとともに，愛着をもつ。 イ　世界の様々な国の歴史や文化などについて理解するとともに，それぞれのよさを尊重する。 ウ　国際社会の一員として，共生していこうとする。 エ　外国語によるコミュニケーション能力を高める。	ア　日本の歴史や文化などに進んで親しみ，よさに気付く。 イ　世界の様々な国の歴史や文化などに進んで親しみ，それぞれのよさに気付く。 ウ　世界の様々な国の人々と交流し，だれとでも仲良く助け合おうとする。 エ　外国語に興味・関心を持ち，歌や言葉に親しむ。	ア　日本の歴史や文化などについて理解を深め，大切にしようとする。 イ　世界の様々な国の歴史や文化などについて理解を深めそれぞれのよさを尊重する。 ウ　世界の様々な国の人々と積極的に交流し，地域市民として共に生きていこうとする。 エ　外国語による簡単な日常会話に慣れ親しむ。
情報	多くの情報の中から自分に必要な情報を収集・選択し，活用することができ，情報の積極的かつ責任ある発信ができる資質や能力を育てる。	ア　多くの情報の中から，自分の目的に応じて適切な情報を選択して，収集することができる。 イ　収集・選択した情報を，自分の生活に活用することができる。 ウ　受け手の願い・状況等を踏まえ，主体的に責任ある情報の発信ができる。	ア　課題意識をもって，自分に必要な情報を選択して，収集することができる。 イ　収集・選択した情報を，自分の生活に生かそうとする。 ウ　相手の気持ちを考え，積極的に情報の発信ができる。	ア　多様な情報源を用いて，多くの情報の中から，自分の目的に応じた適切な情報を選択して，収集することができる。 イ　収集・選択した情報を，自分の生活に的確に活用することができる。 ウ　受け手の願い・状況等を踏まえ，メディアの特性を生かして，主体的に責任ある情報の発信ができる。
環境	身近な自然について理解と愛着をもち，自然と共に生きていこうとするとともに，自分にできる方法で環境の保全や望ましい環境を創る資質や能力を育てる。	ア　身近な自然について理解するとともに，愛着をもつ。 イ　環境問題と自分たちの生活とのかかわりについて認識を深め，自然との共存について考える。 ウ　環境問題の解決や環境の保全・よりよい環境の創造について考え，自分にできる方法で実践しようとする。	ア　身近な自然に進んで親しみ，自然の大切さに気付く。 イ　身近な環境問題を知り，それは自分たちの生活と深いかかわりがあることが分かる。 ウ　環境問題の解決や環境の保全，よりよい環境の創造を目指した地域の人々の活動や機関の取り組みについて知り，自分にもできる方法で実践しようとする。	ア　自然に対する豊かな感受性や環境に対する関心を高め自然を大切にしようとする。 イ　環境問題と自分たちの生活とのかかわりについて理解を深め，全地球的な視野に立ち，自然との共存について考える。 ウ　環境問題の解決や環境の保全，よりよい環境の創造を目指した取り組みが抱える構造的な問題について認識を深めるとともに，自分の生き方を振り返り，主体的日常的に実践しようとする。
福祉	自分を含め，様々な人々がそれぞれに生き甲斐をもって生きようとしていること，そのためにお互いに助け合っていることを理解し，より一層充実した福祉社会の実現に貢献する資質や能力を育てる。	ア　自分を含め，様々な人々がそれぞれ生き甲斐をもって生きていることを理解し，すべての人の存在を尊重する。 イ　福祉問題と自分たちの生活とのかかわりについて理解し，福祉に対する認識を深める。 ウ　福祉問題の解決やみんなが生き生きと充実した生活を送ることができる福祉社会の実現について考え，その実現に貢献しようとする。	ア　身近な高齢者，年少者，障害者などについて理解し，それぞれの人の存在の大切さに気付き，温かい気持ちで接する。 イ　様々な人々のおかれている社会的状況を知るとともに，身近なところに配慮や工夫があることが分かる。 ウ　身近な福祉問題の解決の方法やみんなが幸せに暮らせる社会の実現について考え，そのために自分にもできる活動を実践しようとする。	ア　様々な人がそれぞれに生き甲斐をもって生きていることや互いに助け合っていることを理解し，他者を尊重し，思いやりをもって接する。 イ　日々の生活は人々の支えや助けによって成り立っていることや福祉社会の現状や問題点を知り，福祉に対する認識を深める。 ウ　みんなが生き生きと充実した生活を送ることができる福祉社会とはどんなものかを考え，福祉問題の解決やより一層充実した福祉社会を実現するために自分にもできる活動を進んで実践しようとする。
健康	生きていることのすばらしさや生命の尊さに気付き，自分や他人の生命を尊重する心をもち，心身共に健康で安全な生活を営む資質や能力を育てる。	ア　生きていることのすばらしさや生命の尊さに気付き，自他の生命を尊重する。 イ　心身共に健康で安全な生活についての認識を深め，よりよい生活を営もうとする。	ア　自分の成長を振り返る活動を通して，生きていることのすばらしさや生命の大切さに気付き，すべての生命を大切にしようとする。 イ　健康で安全な生活を送るために欠かせない基本的な生活習慣の大切さが分かり，自分の生活をよりよいものにしようとする。	ア　生命誕生のメカニズムを知り，自分の命が周りの人々とのかかわりの中で育まれてきた尊いものであることを実感し，すべての生命をいつくしむ心をもつ。 イ　病気やけがの予防，健康増進のメカニズムを理解し，自分の生活を見直して，よりよい生活環境を創造しようとする。
進路	労働の喜びや苦労，意義について理解するとともに，自分の将来について考える資質や能力を育てる。	ア　労働の喜び・苦労を知り，労働の意義について考える。 イ　いろいろな職業と自分たちの生活とのかかわりについて知り，それぞれの職業の大切さを理解する。 ウ　今の自分を見つめ，自分の将来について考え，自己を高めていこうとする。	ア　身近で働く人々の喜びや苦労を知り，働くことの大切さに気付く。 イ　身近な人々の仕事を知り，その仕事は自分たちの生活を支えていることが分かる。 ウ　自分自身に目を向け，自分のよさに気付き，よりよい未来に向かって意欲的に生活しようとする。	ア　地域の人々とともに労働することを通して，働く人の喜びや苦労を実感し，労働の意義について考える。 イ　いろいろな職業と自分たちの生活とのかかわりを理解しそれぞれの職業の大切さが分かる。 ウ　成長の足跡を振り返り，これからの自分の生き方について考え，なりたい自分に向かって，自己をより高めていこうとする。
郷土	自分たちが暮らす地域の歴史，伝統，文化，生活習慣，産業などについて理解と愛着をもち，構成員の一人として，よりよい郷土を創る資質や能力を育てる。	ア　地域の歴史，伝統，文化，生活習慣，産業などについて理解するとともに，愛着をもつ。 イ　地域を支える人たちの働きや活動を知りその現状や問題点について理解する。 ウ　地域社会の構成員の一人として，地域の文化や生活等を守り，受け継ぐとともによりよい郷土を創っていこうとする。	ア　地域の身近な文化や生活に関心をもち，そのよさに気付く。 イ　地域を支える人々の活動に触れ，人々の思いや願いを知る。 ウ　自分も地域社会の一員であることに気付き，地域の文化や生活を守るために自分にできることは何かを考えて実行しようとする。	ア　地域の歴史，伝統，文化，産業などの特色に気付き，郷土を愛する心をもつ。 イ　地域を支える人々の働きや活動の様子を知り，地域社会の現状や問題点を理解する。 ウ　地域社会の一員として，地域の文化や生活等を守るとともに，よりよい郷土を創っていくための方法を考え，実行しようとする。

確認事項
※健康のスコープの内容は，人間の生命を中核にしている。動植物などの生命尊重については，環境のスコープの内容のアにも含める。
※進路のスコープの内容のウでいう自分の将来とは，職業を限定するのではなく，なりたい自分を指す。

5　総合的な学習と個に応じた指導でどんな子どもが育つか

（1）　はじめに

近年のいわゆる「学力低下」に関する指摘は，２つの論点をもっていると言えよう。

１つは，現状において子どもたちに「学力低下」の事実が存在するのではないかという危惧である。これについては，IEA による国際比較調査等が示す通り，日本の小・中学校の学力は少なくとも知識・技能面に関しては，国際的に見ても依然高い水準にあることが明らかとなっている。

今１つは，現在はいいとしても，今後，子どもたちの学力が低下するのではないかという懸念である。具体的には，新学習指導要領の実施が子どもたちの「学力低下」を引き起こすのではないか，と予測する人がある。

改革が途上にある今，この問いに答えるのは難しい。しかし，方法はある。

新学習指導要領は，総合的な学習と個に応じた指導をいわば改革の二本柱にしていると見ることができるが，これらは決して新しいものではない。類似の試みは，かなり以前から存在した。ならば，そこでの成果を検討することで，ある程度の予測は可能ではないか。

愛知県東浦町立緒川小学校，同卯ノ里小学校では，すでに20年以上も前から，３年生以上70時間程度の総合的な学習，教科においても子どもの意思決定を大幅に尊重する個に応じた指導など，まさに今回の学習指導要領の先取りとも言える実践を独自に展開してきた[1]。以下では，この２校の卒業生の動向を追跡調査した結果を参照しながら，先の問いについて考えてみたい。

表1-15　高校生の「学習についての考え方」の出身小学校による違い

	緒川小 (52名)	卯ノ里小 (100名)	一般校 (264名)	F値 (2,413)
自分の立てた計画に従って，１人で学習していくことが好き	2.87a	2.67a	2.17b	20.19**
自分でテーマを決めたり選んだりして，いろいろな活動を通して学習するのが好き	2.94a	2.96a	2.23b	34.89**
勉強したことをレポートにまとめることが好き	2.44a	2.27ab	2.03b	5.24**
本をよく読む	2.63	2.39	2.35	1.61
ＴＶや新聞などのニュースによく目を通す	2.81a	2.73a	2.46b	4.97**
図書館・博物館・美術館・展覧会などに自分から行く	2.25a	2.34a	1.86b	9.33**
映画館・コンサート・各種イベントなどに自分から行く	2.54	2.69	2.49	1.32
自分の趣味や興味のあることに，時間や労力をかけている	3.27ab	3.36a	3.06b	4.39*
現代の社会問題について関心がある	2.63a	2.61a	2.03b	21.16**
コンピュータに関心がある	2.88	2.87	2.62	2.66
自分の将来について，自分なりの計画や見通しをもっている	2.92ab	3.03a	2.70b	5.16**
毎日の生活の中で，大切にし有効に過ごそうとしている時間がある	2.87ab	3.05a	2.55b	12.17**
小学校で学んだことが役立っている	2.98a	3.12a	2.63b	11.97**

＊　５％水準有意，＊＊　１％水準有意

平均値に添えた英字が同じものを含まない組み合わせの間には，５％水準で有意な差のあることを示す。

（2）　自分で計画を立てて学び，毎日を有効に過ごしている

我々は，平成９年から10年にかけ，当時高校２年生であった緒川小，卯ノ里小の卒業生に質問紙調査を行い，その結果を近隣の一般小学校を卒業した同期の高校生の回答と比較検討した（表1-15）。表中の値は，各問いに対し，「おおいにそう思う」から「まったくそう思わない」までの４段階で判断を求め，群ごとに平均値を算出したものである。すべての項目に対し値が高い（そう思う傾向が強い）方が望ましい状態にあると言えよう。

結果は，ほぼ全項目について緒川小・卯ノ里小の卒業生の値が高く，分散分析による平均値の差の有意性の検討結果においても，表中に示したように，いくつかの項目で高い統計的蓋然性をもって有意な差がある。

結果が示すように，両校の卒業生は「現代の社会問題」に高い関心を示し，「自分の立てた計画に従って，１人で学習していくこと」や「自分でテーマを決めたり選んだりして，いろいろな活動を通して学習する」のが好きで

あった。そして，そのような主体的で問題解決的な学びを遂行するためであろう，「ＴＶや新聞などのニュースによく目を通す」し「図書館・博物館・美術館・展覧会などに自分から行く」がより高い。

また，「自分の将来について，自分なりの計画や見通しをもって」おり，「毎日の生活の中で，大切にし有効に過ごそうとしている時間がある」など，目的ある充実した日々を送っていることがうかがえる。彼らがまさに「17歳」であることを考えるにつけ，このことは重要であろう。

そして何よりも，「小学校で学んだことが役立っている」実感をもっている点が心強い。

「学力低下」問題の中には，要素的知識の欠如と同時，あるいはそれ以上に，学びへの積極的な態度やそれを実現するのに必要な学習方略，さらには学習習慣の欠如を指摘するむきがあるが，両校の卒業生はむしろそれとは逆の傾向性を示している。したがって，総合的な学習や個に応じた指導が，その意味での「学力低下」をいっそう助長するといったことは，少なくとも両校の実践を想定する限り，考えにくいと言えよう。

（３） 受験にも強いとは意外？

もっとも，以上の側面は両校の教育が意図的にねらった部分であり，よくて当然と言えなくもない。「学力低下」を危惧する多くの声は，これら従来軽視されがちだった側面を否定はしないが，そちらへの力点の移動が受験学力を典型とする伝統的な学力の低下をもたらすことをむしろ心配している。

この点については，田中節男による緒川小卒業生の進学状況に関する追跡調査結果が参考になる[2)]。

田中によると，1990年３月の緒川小卒業生の大学・短大への進学率は56.4％であったという。同年の愛知県平均が37.9％だから，この進学率は非常に高い。さらに内訳を見ると，国公立大学が30％で，全国平均の25％を大きく上回っている。

これらの結果から田中は，「大学入学時点で全国平均以上の学力を身につけている」と結論づけた。総合的な学習と個に応じた指導で育った子どもたちは，受験学力においても遜色がないどころか，かえって受験に強かったのである。

もっともこの背後には，緒川小が子ども主体の生活実践的な学習を組織する一方，読み書き算はもちろん，広く教科の知識・技能の確実な定着を図るべく，ドリルや習熟度別指導を徹底してきたことがあろう。

「やっぱり知識は大事なんじゃないか」という人があるかもしれないが，「知識偏重」への反省は，なんら「知識軽視」を意味しない。それは，豊かさの拡張とバランスの回復の道標である。

むしろ注目すべきは，その実現方策であろう。緒川小は一斉画一的な「詰め込み」ではなく，新学習指導要領でも提唱される個に応じた指導によってこれらを実現してきた。しかも総合的な学習を実施しながら，したがってかなりの時数を取られながら，なおこれだけの成果をあげられるという事実にこそ注目したい。

（４） よい原理を正しく実践化することの難しさ

以上のようにデータは，緒川小卒業生には，伝統的な受験学力においても，学びへの積極的な態度や学習習慣などにおいても，「学力低下」が認められないことを示している。このことは，総合的な学習なり個に応じた指導が，その目的に照らして原理的に妥当であることを示唆していよう。

ただ，これらはすべて，緒川小や卯ノ里小が達成した実践の質を前提に初めて成立する点に注意されたい。そして，状況は楽観的ではない。

個に応じるということを子どもへの迎合や放任と解する誤解，「活動あって学びなし」に陥っている授業が，近年，横行しているのである。もっとも深刻なのは，「よさ」を認めるという美名の下，子どもの現状を漫然と肯定し，一切の教育的かかわりを放棄する愚行であり，「知識偏重」への反省を安易に「知識軽視」に結びつける誤りであろう。

「新しい学力観」が提唱したのは学力論の拡張や豊富化であって，そこでは，知識は以前にも増して重要なのである。「関心・意欲・態度」も，獲得される知識と切り離して考えられるべきではないし，そもそも「関心・意

欲・態度」とはそのようなものではない。

また，緒川小，卯ノ里小の当時の実践が，あたりまえのことながら，教育内容を特に削減することなく実現されている点にも注目したい。「学力」にかかわる議論は必然的に教育内容に意識が向かいやすいが，実践的には教育方法の工夫によって改善できる部分がまだまだあるのである。

前回，そして今回の学習指導要領改訂を導いた「知識偏重」「詰め込み教育」批判も，本来的には教育方法の問題であろう。たしかに今回の大幅な教育内容の「厳選」は，完全学校週5日制による絶対的な時数の縮減に伴うものであり，それ自体は避けがたいものであった。しかし，「厳選」は時数縮減幅以上になされた。

この「厳選」の背後には，それによって生み出された「ゆとり」が教育方法の抜本的見直しを誘導し，結果的によりたしかな「学力」が保障できるというストーリーが想定されているのではないか。このストーリーは非常に魅力的だし，多すぎる教育内容が教育方法の工夫をままならなくしてきたという理解は，広く現場教師にも共有されているように思われる。さらには，ゆとりを「効率的」に生かし，子どもたちに基礎・基本の確実な定着を図るべく，個に応じた指導という具体的な手立ても提示されてきた。

しかし，このストーリーがどこまで現場に周知され，個に応じた指導の具体がどこまで正確に理解されているかとなると，まだまだ心もとない。多くの犠牲を払って生み出されたせっかくのゆとりも，従来通りの指導を踏襲していては，単なるブランク（空白）にもなりかねない。もし今回の措置が，結果的に教育方法の改善を伴わない単なる内容削減だけに終わったなら，「学力低下」が必至であることも事実だろう。

原理的によくとも，正しく実践化されなければ効果は期待できない。緒川小・卯ノ里小の追跡調査結果が示すように，総合的な学習や個に応じた指導には現状を改革する大きな可能性があるが，それを可能性で終わらせるか見事に花開かせるかは，まずは教育行政の具体的かつ実効性ある条件整備，さらにはそれを受けての現場の研鑽と努力にかかっていると言えよう。

〈引用文献〉

1） 愛知県東浦町立緒川小学校『個性化教育へのアプローチ』明治図書出版，1983。

2） 田中節男「個性化教育の成果」『椙山女学園大学研究論集』第26号（社会科学編），1995。

（奈須正裕）

『学力低下論批判』（黎明書房）